様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２８ 日現在

機関番号：３２６７８
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ１３２０５

研究課題名（和文）グループ・ライティング教育の多様性―文化史研究からカリキュラム開発へ

研究課題名（英文）Diversity of Writing Education: From Cultural History to Educational Practice

研究代表者
Ｃ・Ｅ　Ｍａｄｅｅｎ（Eric, Madeen）

東京都市大学・共通教育部・准教授

研究者番号：６０２９８００７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：アメリカで制度化されたクリエイティブ・ライティングを歴史化することで、その制度がもつ社会的機能を分析することができた。一見、普遍的で一般的にみえている制度も決して単純なものではなく、時代状況や、ときには政治的状況をも含んでいる。そうした要素を調べることで、本課題は、現代的な問題意識に基づいて、それらを変換し、教育方法の授業実践へと変換した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ライティング教育のなかに、アメリカの市民教育の要素が入っていると意識したことで、日本で実践されているライティング教育が、どのように変容しているかを考えることができた。それにより、日本のライティング教育において、動機づけや書く内容をみつける力の弱さを指摘し、学生の自己意識・自己肯定感を育成する教育的実践に結び付けることができた。

研究成果の概要（英文）：By historicalizing the creative writing systematized in the United States, we were able to analyze the social function of the system of writing education in Japan and Asia. The seemingly universal system is by no means simple, but it also includes historical and sometimes political situations. By examining these factors, this task converted them into the teaching practice of teaching methods based on contemporary awareness of problems.

研究分野：クリエイティブ・ライティング

キーワード：クリエイティブ・ライティング　アメリカ文学　冷戦期文化　アクティブ・ラーニング　動機づけ　ZINE　創作

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

アメリカの教育における最良の制度としてアカデミック・ライティングを分析することで、市民教育のための読書･文章作成方法の文化史のなかで俯瞰し､そこにある民主主義の本質や、あるいは、現代社会がどうしても抱えることになる民主主義の矛盾などが、教育現場のなかに顕在化し、それらを社会学的な視点で分析する論考も登場しはじめている。このようにアメリカの教育制度のなかで醸成されたライティング教育の取り組みを題材としてとりあげることで、そこにある本質や問題点を､日本の英語教育の文脈に変換していくことが必要である｡それは、主にアメリカで考案される英語教育カリキュラムを、普遍のものとせず、日本文化や精神的風土との差異を適切に知り、それを活かした言語教育を考えるために必要な作業となる。文化史の知見を、教育的実践に生かすことを目標としている。

２．研究の目的

本課題は、３つのトピックごとに計画を進めた。現代の GW という現象を、「書く」という権力を、集団内で刺激し合い、適切に管理するプロセスととらえ、文化史として整理・分析に取り組んだ。

（１）文化史研究からアクチュアルな現代的問題への提案―文化としての「大学」を考える

英語教育の現場で､「作者」にこだわる理由、それは、学生個人を適切評価するため、逆にいえば「剽窃」をさせないためであろう。GWという権力のマネージメントをシステム化してきたはずのアメリカの大学も、転換点を迎えている。My Word!: Plagiarism and College Culture(2010)では、GWが適切に行われた結果、ある課題にクラス全員がほぼ同じ内容のエッセイを生産することになってしまった例を紹介している。ここでは、事実上「作者」は偏在しながらも消滅している。しかし、同時に教師が学生を評価できるという、また教育という「権力の活用制度」も無効化されたのだ｡「書く」という権力を分散させると、それが教育の仕組み自体に影響を与える皮肉な例である。アメリカがGWの成熟期をすぎ、再考する時期にある。だからこそ、それを 1 つのサンプルとして検討し、日本でそれをいかに導入し、学生にとっての活力とするのかを今こそ考える時に来ているのである。日本社会の中で、大学がどんな存在意義を獲得するべきなのか、獲得できるのか、という大学文化の検討に、文学研究や文化史の観点から議論を高めていける。文化史研究（Writing という行為に政治性や歴史性を見出す）から、同時代の問題意識（地域的・物理的障壁が生じている状況への問題提起）というダイナミックな接続を試みる。そして、この課題は日本で英文学研究をしているからこそ貢献できる内容と言える。

（２）Writing 研究を深化させ、American Studies／ Asian Studies に貢献する

現在、リテラシー史研究など、新しい系譜学の研究が盛んである。Composing a Care of the Self: A Critical History of Writing Assessment in Secondary English Education（2012）や、2013 年 11 月に Routledge から出版予定の Teaching Creative Writing in Schools: History, Creativity, and Childhood など、Writing の過程に注目した文化史研究がいま盛り上がりを見せている。

それに続くように、アメリカ帝国主義再考として、世界各地域でのアメリカ文化受容史の研究も盛んに行われている。たとえば、中国での英語作文教育の歴史は、2010 年に、サザン・イリノイ大学出版局から、Writing in the Devil's Tongue: A History of English Composition in China が出版された。日本でも、明治期や戦中・戦後の英語教育史や英文学受容史は、研究が進んでいるところだが、現代日本の大学英語教育を歴史化する作業はいまだに少ない。現代アメリカの Writing 事情と日本の大学英語教育を接続する本研究は、こうした研究との相互補完的な影響関係が予測される｡英米人が見落としがちな､あるいは回避しがちな主題に対しても、真摯に向き合い、日本人の特色を生かした精緻な分析に基づく深い考察が可能になる。

（３）現代の英語教育法（多読・創作教育）への展開と、理数系科目との連携

文化史をふまえた GW の導入をすることで、日本社会に根差した教育実践に貢献できる。

「作者主義」のライティング教育では、学生が机に１人で向かう姿（個別主義）が回避できない。あるいは、評価についても、教師対生徒という単一的な関係になりがちだ。それが功を奏する場合もあろうが、多くの場合、精神的な疲労のほうが大きい。一足飛びに「アメリカ人になる」教育ではなく、その文化的側面を適切に分析し、ときには機能面だけを取り出して、心理的障壁をつくならい英語学習を考案する。具体例として、CLIL（Content and Language Integrated Learning）を 2013 年度から実践しており、また、Creative Non-fiction の発送を採用し、英語ミニ Book の執筆・編集作業を通じて、学生たちの「日常生活」「大学で現在学んでいること」と、言語とを結びつける作業をめざす。

３．研究の方法

（１）アジア圏の大学において、クリエイティブ・ライティングコースが設置されている大学について調査し、それらの学科（コース）に所属する教員へのメールを通じたインタビューを行った。たいていの場合、English Course に併設または、下部組織として存在していた。また、

「日本にはなぜクリエイティブ・ライティングコースは定着していないのか」という問いに対して、むしろ、「なぜアメリカにおいてのみ、クリエイティブ・ライティングコースが盛んなのか？」という助言を得ることになり、以後、アメリカのライティング教育を相対的な視点で捉える作業を、文献調査と議論を通じて行った。
（２）もう一つの柱として、グループ・ライティングの一つの形態として、ニュージーランドのラーニング・ストーリーを参考に、 日本の保育園（社会福祉法人ユーカリ福祉会　たかすな保育園：藤沢市）にて、グループ・ライティングと保育の記録を接続させる試みを行っている。これは、ライティングのプロセスが、保育士の業務省力化につながる制度設計を、IT システムなどを活用し、提案した。
（３）　最後に、多読メソッドや英語リーディング科目におけるライティングの可能性を考えている。こちらは、多読活動を図書館と連携しながら進め、また、尾山台商店街やその他、地域の方へのインタビュー経験を交えたうえでのライティング活動など、小さな交流を進めるなかで、準備を進めている。また、キーワードとして、個人的な出版活動、同人誌活動といわれる ZINE（ジン）というメディアとの連携も試みる。

４．研究成果
（１）冷戦期文化研究との接続
関係図書の調査も併せて考えると、クリエイティブ・ライティングコースとは、アメリカ冷戦期において理想とされたリベラルな市民にとって習得するべき技能であり、その人間像を生み出すのが創作科ということになる。本プロジェクトは、こうしたアメリカの冷戦期の価値観と創作をめぐる問題意識の接続の必要性に気が付くことができた。またこれらは、日本の英米文学研究と冷戦期文化研究との組み合わせが盛んになってきた批評的潮流も追い風となった。フィリピンの University of the Philippines Diliman の Department of English and Comparative Literature の教授陣たちへコンタクトをとり、教育制度についての情報交換を行った。
　このように、アジア文化圏と冷戦期というキーワードをクロスさせ、クリエイティブ・ライティングを俯瞰することで、日本文化とライティングに関する分析をすすめ、日本文化のなかにある「型」の思想が、いわゆる作文教育や国語教育と結びつき、英語でライティングを行う際にも使われているという点を論じた。

（２）多読カリキュラムとライティングの連携に関する取り組み
　日本で実践されている多読授業について、物語の楽しさや異文化理解の知的刺激などが、リーディングとライティングの動機づけに有効であるという仮説に基づき、東京都市大学・図書館とも連動した多読支援を実践した。(2016・2017 年度)これらの実践をカリキュラムとして発展させるために、講師・深谷素子教授（鶴見大学）を招聘し、学内向けの研究会と、一般講演会を行った。「大学教育における多読の可能性」（2017 年 9 月 15 日（金）13 時 30 分～15 時 30 分　会場：二子玉川　東京都市大学　夢キャンパス）
　ライティングは、書くものの思考実践の場であり、自己の主体を社会のなかでどう位置付けるか、その文章で、どのような自己像で書くのかが定まっていると書きやすいという立場にたち、文化（ライフスタイル）とライティングのテーマにたどり着いた。このテーマでは、ZINE を通じて、グローバルな価値観を学生につたえるための授業実践を行うことができた。ZINE は、大規模出版社や書籍流通制度を使わずに、個人的な意見を表現する場として、活況を呈しており、一極集中や過剰な資本主義へ距離をとるライフスタイルの象徴ともなっている。東京都市大学の選択科目「文学で学ぶ英語」や「日本文化を国際的に発信するゼミナール」を通じて、こうした文化を学生に伝えながら、学生が能動的にライティングを行う動機づけ、そして、より伝わるように工夫しようとする向上心などを育成することができた。
　また、英国 University College London での CLIL 授業や通訳育成コースなどのカリキュラムを参考にして、即興性などを養う授業スタイルや、こまかなニュアンスの違いを語学的な気づきへと変換する手法なども授業実践に組み入れることができた。そして、世田谷区尾山台商店街おやまちベースで、学生作成の ZINE を展示する ZINE ミニ・フェスを３日間（2019 年 3 月 12 日～14 日）実施した。

（３）保育園における保育士の自己肯定とライティング
ニュージーランドの保育記録制度である「ラーニング・ストーリー」は、保育士と子ども、保護者をむすぶ場所となっている。このラーニング・ストーリーを、日本の保育の現場でも実践するべく、ニュージーランドの IT 企業によるオンライン・サービス「Story Park」を導入し、機材を園内に設置し、保育士たちが記録し、そして保護者とも共有するまでを段階的に行った。これを通じて、類似のサービスとして、日本で行われているドキュメンテーションが写真中心の視覚情報を共有する場となりがちなのに対して、「ラーニング・ストーリー」では、写真のアングル・構図が、保育士たちの専門家としての視点と連動していることに注目した。今回の Story Park 導入においても、ニュージーランドの特徴がきちんと反映された場になるように、園長の協力のもと運営を行った。それにより、保護者たちからの反応が、保育士たちの満足感や自己肯定感の向上につながったことが保育士たちへのインタビュー等により確認できた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　4　件）
①Eric Madeen, Hiroyo Sugimoto. THE STATUS OF CREATIVE WRITING AS AN ACADEMIC DISCIPLINE: WHERE IT THRIVES AND DIVES WITH A SPECIAL FOCUS ON JAPAN AND ITS “KATAIZED” CULTURE、東京都市大学　共通教育部　紀要、査読無、12 巻、2019、25-32.
②杉本裕代、語りの視点から考えるラーニング・ストーリーの可能性：保育者の職業意識と自己肯定、東京都市大学　共通教育部　紀要、査読無、12 巻、2019、33-40.
③杉本裕代、「世代」というテクスト、オベロン、査読無、72 巻、１号、2017、75-79
④Koichiro Shida, Hiroyo Sugimoto, Arata Kurata. *A Small System to Support Nursery School Teachers Making Learning Stories, Proceedings of 2017 5th International Conference on Information and Education Technology*. 2017.
http://dl.acm.org/citation.cfm?doid=3029387.3029406

〔学会発表〕（計　4　件）
① 杉本裕代、精読と雑談のあわい―カード式読書トークを通じて考える文学研究的教材開発、日本英文学会 関東支部、2019
②杉本裕代、「多読」を背景としたクリエイティブ・ノンフィクション・ワークショップ、国際教養学会、2018
③杉本裕代、日本の保育における「書くこと」と「働くこと」：ニュージーランドのラーニング・ストーリーをてがかりに、カルチュラル・タイフーン、2017
④Hiroyo Sugimoto, Yumi Yahagi. Building Communities through Creative Non-Fiction Writing. The 4th International Conference on Education and Social Sciences. 2017

６．研究組織
(1)研究分担者
研究分担者氏名：杉本 裕代
ローマ字氏名：SUGIMOTO Hiroyo
所属研究機関名：東京都市大学
部局名：共通教育部
職名：講師
研究者番号（8 桁）：20581797

研究分担者氏名：秋山 義典
ローマ字氏名：AKIYAMA Yoshinori
所属研究機関名：東京都市大学
部局名：共通教育部
職名：教授
研究者番号（8 桁）：70298008

(2)研究協力者
研究協力者氏名：志田 晃一郎
ローマ字氏名：SHIDA Koichiro

研究協力者氏名：矢作 由美
ローマ字氏名：YAHAGI Yumi

研究協力者氏名：倉持 和歌子
ローマ字氏名：KURAMOCHI Wakako

研究協力者氏名：倉田 新
ローマ字氏名：KURATA Arata

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。